

近代日本における門柱のタイポロジー

藤木 竜也

例えば、住宅の平均寿命が 38.2 年（国土交通省 令和 4 年度住宅経済関連データ）といわれるように老朽化や機能改善のため新築建替が行われるのは多くの建築がもつ定めである（歴史的建造物では時に保存問題に発展する）。この時、建築は姿を変えるが、これを取り巻く門や塀は使用に影響が少ないこともあり残されるケースを散見する。これらは過去にこの敷地が造成ないし建築行為が行われた「足跡」を伝えるものという見方ができよう。本研究は、年代判定の指標を得ることを主な目的に文化財建造物になる明治～昭和期の門柱について傾向と特徴を捉えるものである。

「国指定文化財等データベース」記載の重要文化財・登録文化財の ①長屋門・薬医門など伝統的な門、②表門の特質を捉えるため町家の脇に構えられた門、③記念門・凱旋門など独立性の高い門を除いた「門柱」をもつ門 170 件よりみると、次の傾向と特徴が見出せた。

建物用途：住宅 72 件(42%)、学校 50 件(29%)、宗教施設 13 件(8%)、官公庁舎 12 件(7%)の順に多くみられた。他項目の分析にあたって建物用途での考察では、この 4 つを扱う。

門柱高さ：「国指定文化財等データベース」に門柱の高さが明記される事例は少なく 65 件であった。門柱高さは平均 2.6m で、用途別では学校と宗教施設がやや高く 2.9m、住宅が 2.6m、官公庁舎が 2.4m となった。なお、建設年による推移や偏りは認められない。

門柱間口：門柱の間口は 129 件で記載があり、平均 4.6m であった。用途別では明らかな傾向があり、学校が広く 6.5m、次いで官公庁舎 4.5m、住宅と宗教施設が共に 3.1m となった。官公庁舎が広く、そして宗教施設が狭い傾向であり、門柱の高さと間口の広さには相関性がないことがうかがえたが、間口に関しても建設年による推移や偏りは見られず、これは年代判定の根拠に用いるのが難しいことを意味するといえた。

構造種別：門柱の構造は、石造 73 件(43%)、鉄筋コンクリート造 67 件(以下 RC 造 39%)、レンガ造 22 件(13%)の順に多かった。用途と同様に以下はこの 3 つの構造種別をもって扱う。10 年ごとに整理した年代別でみると(表 1)、石造は全年代で使用されており、近代日本における門柱の基本的な構造種別であったといえる。レンガ造は昭和 6 年まで、RC 造は明治 45 年以降に見られ、大正時代を境にレンガ造から RC 造へ転じた推移がうかがえる。なお、これは躯体構造の一般的な推移と符合する。

建物用途でみると(表2)、学校にはレンガ造の適用が多く、宗教施設はRC造の適用が少ない傾向が認められた。また、官公庁舎にはRC造の適用が多いが、これは事例が大正・昭和初期に集中していることに起因するものと考えられる。

門柱形態:整理分類した門柱の形態(図1)を基に集計すると、1-1 23件(14%)、1-5A 14件(8%)、3-5A 13件(8%)、3-1 11件(6%)、3-4B 10件(6%)、2-5A 7件(4%)、3-5C 7件(4%)の順に多く、これらで全体の半数を占めた。つまり、基壇の有無に加えて、角柱もしくはそれに笠石を載せる形態を基本形にしていたことを浮き彫りにし得た。

これを年代別に整理すると、大正・昭和初期にまとまっており、明治時代の多様な形態が収斂されていく動向がうかがえる(表3)。さらに用途との関係性をみると(表4)、1-1には偏りは無いが、1-5Aと3-5Aは住宅に採られ、3-4Bは学校に採られる傾向が読み取れる。3-4Bの学校事例のうち7件が愛知県所在であり、地域的な偏りという可能性も視野にこれは慎重にみる必要がある。さらに注目できることにセセッションもしくはアール・デコの影響と思しき門柱への幾何学造形の適用(23件, 14%)が挙げられる。その流行を伝えるように大正・昭和初期のRC造の事例(16件)に採られる傾向が認められた。

表1 構造種別の年代推移

	石造	レンガ造	RC造	全体計
明治元年代 [1868-76]	2	1	0	3
明治10年代 [1877-86]	1	0	0	3
明治20年代 [1887-96]	6	1	0	7
明治30年代 [1897-1906]	12	2	0	15
明治40年 - 大正5年 [1907-16]	13	11	1	25
大正6年 - 大正15年 [1917-26]	18	5	20	44
昭和2年-11年 [1927-36]	10	2	32	45
昭和11年-21年 [1937-46]	4	0	8	13
昭和22年以降 [1947-]	2	0	1	3

表2 建物用途別の構造種別

	石造	レンガ造	RC造	用途計
住宅	31	6	30	67
学校	20	10	18	48
宗教施設	5	3	2	10
官公庁舎	3	0	9	12

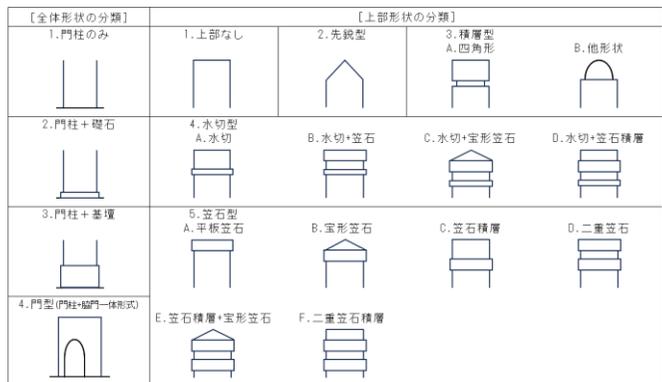


図1 近代日本における門柱の形態分類

(左表)表3 門柱形態の年代推移

	1-1	1-5A	2-5A	3-1	3-4B	3-5A	3-5C	全体計
明治元年代 [1868-76]								3
明治10年代 [1877-86]					1			3
明治20年代 [1887-96]						1		7
明治30年代 [1897-1906]	1						1	15
明治40年 - 大正5年 [1907-16]	4	1				1	1	25
大正6年 - 大正15年 [1917-26]	7	5	4	4	5	1	4	44
昭和2年-11年 [1927-36]	8	5	8	3	3	3	1	45
昭和11年-21年 [1937-46]	1	1		1				13
昭和22年以降 [1947-]	1	1						3

(下表)表4 建物用途別の門柱形態

	1-1	1-5A	2-5A	3-1	3-4B	3-5A	3-5C
住宅	7	8	5	7	2	5	1
学校	8	1	2	1	7	1	4
宗教施設	2	1	2	0	1	0	0
官公庁舎	1	1	3	2	0	0	1

謝辞: 本稿は、飯田友貴さん(千葉工業大学創造工学部建築学科令和2年度卒業論文)の研究成果に基づくものである。ここに記して謝意を申し上げます。